
私は明日(あした)の夢をみる

雑月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は明日の夢あしたをみる

【Nコード】

N5709E

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

私はよく正夢をみる。その夢は良くも悪くも実現していく。昨日見た夢が今日の私の行動を変えていく。

私は明日の夢をみる

薙月 桜華

私は目覚ましの音楽で目覚めた。朝から五月蠅いほどの音量で流れる好きな曲は私のお気に入り。これを聞くと朝が気分良く迎えられる。それは何処までいっても多分だけだね。

私が使っている目覚ましは、鐘を鳴らすような物理的なものではない。パソコンで編集した音を録音して目覚ましに出来るものだ。これで自分好みのハッピーな毎日が訪れたと思う。ひとまずこれで寝起きは何とかなる。

それでもなんとかならないものはあった。それは夢だ。私はよく正夢を見る。その夢は目覚める直前のほんの数秒だけに見る。いや、自分が数十秒と思っているだけで実際はもっと長いのもかもしれない。とにかく私は良くそういう夢を見る。ストーリーのごとく流れる内容は自分の意思無しに進んでいく。

今日の朝も夢を見た。それはとても良くない夢だった。私の通う学校の教室で起こったこと。何故私の学校だと分かるかというと、教室にいるほかのみんなが何時も見ると見るクラスメイトだからだ。数学の数式や図が書いてあって数学の先生もいた。

ああ、思い出そうとしても思い出せなくなっていく。この夢が夢で終わって欲しい。完全に目が覚めると、悪い夢を見たことだけしか頭からは出てこなくなっていた。

私はパジャマ姿のまま階段を下りて居間へと向かう。

お母さんは私が起きてきたことに気がつく。

「咲希ちゃんおはよう。」

私の名前は高瀬咲希。中学校に通う二年生だ。一応ここで説明し

ておこう。

台所でお母さんが朝食を作っていた。

「お母さんおはよう。」

テーブルの前へ座るとお母さんが朝食を持ってきてくれた。

「はい。朝食よ。しっかり食べなさいよ。」

出されたのはパンにレタスやハムをはさんだサンドイッチだった。お母さんは私が朝食をあまり食べないから、いつもこのような軽い食事を用意してくれる。

「いただきます。」

「はあい。」

私の挨拶とお母さんの返事で私の食事は始まる。

お母さんは台所で水仕事をしている。先に食べたお父さんの食器を洗っているのだろう。

起きたばかりでそれほどお腹は空いていないものの、少しでもお腹に入れておかないとあとが大変だということは身にしみていた。

だから、少しずつでもパンをかじっていく。そうしているうちにいつの間にか一個を食べてしまった。

「ごちそうさま。」

私はそう言う。サンドイッチは二つ出されたが一個しか食べられなかった。そのまま洗面所に行って事を済ませる。

そして、二階に戻りセーラー服に着替えると鞆を持って玄関へと向かった。私の学校ではセーラー服が採用されている。周りの中学はブレザーなのになぜだろう。ちなみに一番近くの高校は女子高でセーラー服。私が行きたい高校だ。女子高があるということは男子校もある。どちらも進学校と呼ばれる高校である。実際のところ共学のほうが良いような気がする。だけど、家から一番近い共学の高校だと進学には不利になるようだから考えていない。

「行ってきます。」

靴を履くと玄関とは反対側を向いて言った。

「いってらっしゃい。」

台所のほうでお母さんの声が聞こえる。

玄関のドアを開ければ、雲ひとつ無い空が広がっていた。

学校への道を歩く。とは行っても家から学校が見える距離なので、それほど長くは歩かない。

校門を入ると、既に何十台か自転車が駐輪場に止まっていた。生徒のほとんどが自転車通学のために駐輪場は広い。

この学校の昇降口は二つあって、学年によって使う昇降口が違う。二年生なので東側の昇降口になる。一、三年生は西側の昇降口になっている。なぜ二年生だけ東側なのかは分からない。多分、教室が近いからだと思うけどね。

昇降口で上履きに履き替えれば目の前は理科室。階段を二階へと上がれば私が何時も授業を受ける二年四組の教室がある。

後ろから教室へと入ると、まだ教室に居る生徒は少ない。私の席は窓側前から三番目。一度席替えをしているために既に名前順などという並びにはなっていない。

鞆を置いて、時計を見ると七時五十分だった。

この学校の予鈴は八時。本鈴は八時五分になる。何故八時五分という中途半端な時間なのかというと、夏冬で朝の本鈴の時間をずらすことが無いように中間の時間を採用したらしい。ようは面倒だったということなのだろう。八時十分に本鈴と八時に本鈴のころが懐かしい。

席について鞆から本を取り出す。朝の十分間は読書の時間だけど、私はそれ以外でも本を読んでいる。今はアニメ映画にもなった小説を読んでいる。最近文庫版が出たので買ってみた。

大学生である主人公とヒロインに、自分も何時かこういうふうになるのかなと思いつながら一ページずつめくっていく。

突然の鐘の音に時計を見る。八時の予鈴の音のようだ。一度読書をやめて本を机の上に置いた。

「咲希ちゃんおはよう。今日も朝から読書。」

後ろから私に尋ねる声が聞こえた。振り向くと親しい友達が居た。

「綾ちゃんおはよう。うんこれ最近読み始めたんだ。」

私は机の上に置いた本を彼女に渡す。

彼女は渡邊綾^{わたなへあや}。彼女とは小学校からの付き合い。今のクラスで友達と言えるのは彼女だけだったりする。

見た目といえば、眼鏡をかけているということと髪の毛が後ろで一つにまとめられていることかな。因みに私は髪の毛が邪魔だからショートと言われるほどの短さだったりする。

「へえ。こんなの読んでるんだ。私はもっと絵のあるものしか読んだこと無いなあ。」

綾が表紙をみたり中身をぱらぱらとめくっている。この小説は挿絵があるもののそれほど多くは無い。私には正直絵があっても無くても良かった。

「やっぱり、絵は多くないほうがいいよ。絵で想像を固定されるのって良く無いし。」

私は綾から本を返してもらいながら彼女に言った。
「咲希ちゃんって考えてるんだね。私そんなこと考えたこともなかったよ。」

机の端に両手を置いて、彼女は私の顔を覗き込む。

「小さいころから色々小説を読んでるからそう思っちゃうんだよ。」

私は綾にそう言った。実際に、ある児童文学を二度か四度読んだ。その当時は小さかったから内容がよく分からなかったけど。今思えば内容が凄かったと思う。時間の奪われる世界か。今も小説を読む理由はあの本があったからかもしれない。

本鈴が鳴った。時計を見ると八時五分だ。ここからが本当の読書の時間というものである。

「あ、時間だ。じゃあ戻るね。」

綾はそう言うとう自分の席へと戻っていった。彼女の席は廊下側二列目の一番前だ。彼女は目が悪いから一番前になった。目が悪くなるのは困りそうだ。

そう思いながら手に持った本を読み始める。紙の朶を使っているが、何度も使っていると捨てたくなるような状態になる。何かいい朶は無いだろうか。押し花はちょっと嫌だな。

帰ったらお母さんに聞いてみようか、覚えていればだけど。

十分間という時間は直ぐに過ぎた。いつの間にか担任の高崎先生が来る。因みに男の先生で理科担当の人だ。そして剣道部顧問で何時も元気がいい。私は理科が好き。先生の影響は全く無い。

「ホームルームはじめっぞ。」

先生が教卓に出席簿を置くと、私たちに言った。朝は出席確認、提出物の回収など。あとは少々話があったりする。

「じゃあ、今日も頑張ろう。」

そう言うとき先生は教室を出て行く。理科は三時間目にある。なので先生の出番はまだだ。

一時間目は国語だ。林先生が教室に入ってきて来る。

「はい。はじめよ。」

国語の林先生は教卓の前に立つと何時もそう言うて始める。女の先生でちょっと太ってる。

私は正直ここまででは太りたくないと思ってる。これを本人の前で言えたら凄いと思う。私は本が好きで読んでいるためか、文章の読解は何とかできている。だけど、古文とかは苦手だ。同じ日本人が書いたものだと思うと言葉は時代によって違ってくるものだなあと思う。

この先生はたまに高校入試の問題を解かせて私たちに嫌でも受験の二文字を押し付ける。私は何時も気分が沈む。中間や期末はできるのにな。

一時間目が終わって休み時間。次の時間は社会。

時間になり山本先生が教室にはいつてくる。社会の先生は顔が黒い男の先生だ。野球部の顧問をしていて体つきが良い。今日は地理について勉強するも記号がよく分からない。地図から地形はわかっても、そこに何かがあるのかよく分からない。歴史は得意なんだけど

な。二年生になって歴史も現代へと近づいていた。

縄文や弥生時代を学ぶよりも近代を学んだほうが良いと思うのは私だけだろうか。その辺りは少し気になるところだ。

「今日はここまで。」

社会も終わる。次は理科か。教科書、ノート、筆記用具を持って一階の理科室へと向かう。

この学校には理科室が二つある。いや、ほかの学校もあるのかな。理科室に入ると何かを燃やした匂いがする。前のクラスがアルコールランプで何か燃やしたのかな。

今日は教科書での勉強だった。実験が無くてつまらない。柔毛とが出てきた。なんかちよと気持ち悪い形をしている。とは言ってもこれが自分の体の中にあるのだから気持ち悪いとか言っていられないかな。そして理科の授業も終わる。

さてと、次は楽しい体育です。更衣室で体操着に着替えると体育館へと向かった。

体育の授業は女の先生が行う。早川先生って言ったかな。若くてバレー部の顧問だ。ちなみに結婚はしていないらしい。

体育館内で準備運動をしたあと走ったりバレーをしたりした。勉強をしなくて済むこの時間は勉強の名の遊びの時間だと思っている。だけど、入学はじめの体育はつまらない。回れ右とかみんないっしょに同じ事をしてまるでロボットのようだった。それが終われば楽しいけど、その時はどうしようもなくつまらなかった。早く終わって欲しいと思ったことを覚えている。

先生の笛の音で体育の授業が終わる。更衣室へと戻り着替える。とは言っても体育の後は体操着でそのまま過ごす。

教室へと戻ると私たちは給食の用意を始めた。ちなみに私は給食委員だ。後片付けが終わると配膳室へ行く。そして返却された空の牛乳瓶をケースに揃えていく。あまった牛乳などがいただけるのがうれしいところである。

配膳がおわり、みんなで頂きますを言う。そのころから給食時の

放送が始まる。それは給食の食事時に、生徒が放送室に持っていった音楽を流している。

食べ終われば片付けて昼休みである。とは言っても二十分ほどしかない。私は給食委員だから牛乳瓶の整理などで時間が使われる。

その後は掃除だ。それぞれの配置で掃除を始める。外の担当である私は校庭の端にある弓道場裏で草むしりをしていた。そうそう、この学校には弓道場がある。私も弓道部に入っていて何時も弓を引いている。的に当たったときの爽快感はなかなかだと思う。

傍には林がありそこを抜けてくる風が体に当たって涼しい。教室担当時ほどの忙しさは無く。ゆっくりと掃除と言つ名の草むしりをする。

しばらく草むしりしていると音楽が流れ始めた。この音楽は掃除の終了を表す。集めた草を決められた場所に捨てに行く。そうすれば掃除は終わり。

そして、五時間目の授業が始まる。次は数学だ。

本鈴とともに教室へ入ってくる吉田先生。ほっそりした男の先生で肌は白くちよつと不健康に見える。しかも、声があまり大きくないから、何時も教室は静かにせざるを得ない。

「じゃあ、今日は一次関数の続きだね。」

先生はそう言つと大きめの定規を使って黒板に一次関数のグラフを書き始める。私はこう見えても数学は好きなほうだ。なのに、一次関数で x 、 y がともに 0 である中心 点を通つたグラフの問題のときは良く分からなかった。だけど中心点を通らない式のグラフを学ぶようになるとうまく理解できた。ようは難しいほうから簡単なほうを理解したらしい。

今日は二つの線が交差した点の座標を求めるものようだ。先生が例題を黒板に書いていく。先生がこうして頑張るにも、生徒は塾で先にやっていたりとするわけだ。やっていない子との差が広がることになるのは親の考え方の違いなのだろうか。ちなみに私は塾に通っているが学校よりも先に進むことは無い。

そんなことを考えていると、先生は例題を書き終わらせていた。全体を見るとなるほどという解き方だった。

先生は、みんなに問題が書かれたプリントを配り始めた。この先生は例題を説明し終わると問題が書かれたプリントを配る。

私たちはみんな自分の机にあるプリントを見て問題を解いている。だから、変化に気がつくのが遅れた。

「だ、誰ですかあなたは。」

先生の大きな声が教室内に響く。その声にみんなは前を向いた。

そこには、マスクで顔を隠した変なおじさんが居た。その手にはナイフを持っている。

突然のことでみんなは状況が理解できなかったが、私は見覚えのある景色に頭を抱える。

「死ねえあ。」

ナイフを持った変なおじさんが先生へと切りつけた。先生の服が切れる。体まで到達しているかはここからは分からない。この行為で、みんなは状況が理解できたらしかった。口々に叫びだす。私はその中で必死にこの景色の出所を思い出そうとしていた。その間にも先生は変なおじさんの目標にされている。

相手は先生の体にナイフを刺すと、勢い良く引き抜いた。先生は床に崩れ落ちる。

その時点で、みんなは叫びながら教室を出て行き始めていた。

「あ。」

私はその光景を見たとき、やっと思い出せた。これは昨日の夢だ。凄く悪い夢だったから直ぐに忘れてしまったのだ。

それと同時に隣の教室で授業をしていた社会の山本先生が教室に入ってくる。

「咲希ちゃん早く逃げようよ。」

綾の声が隣から聞こえたが体が動かなかった。

社会の先生も夢の中に居た。その先生と男はもみ合って、そして

…。

そこで夢の結末をはつきりと思い出した。

夢の結末は、男が二人の先生を刺したあと私に向かってくる途中で終わっていた。その先は見えていないのだ。見えないならそうならないようにしなければいけない。早く逃げなきゃ。

「綾ちゃん。行こう。」

私と綾は教室の後ろ側の出入り口へと向かって走った。そこから出られれば外へ逃げ切る自信はあった。

誰かが非常用のボタンを押したことで、耳を塞ぎたくなるような音がしていた。遠くから他の先生が走ってくるのが聞こえる。

数学の吉田先生や社会の山本先生のほうを見ると二人とも倒れていた。そしてナイフを持った男は私を目標に捕らえていた。

「きゃあ。」

私は叫びながら出入り口へと向かって必死に走った。しかし、後ろから伸びてきた手に触れる。

「いやあ。」

私は男の手に捕まってしまった。綾は私の悲鳴に気がついて、後ろを振り向いた。

「咲希ちゃん。」

綾は私を見て叫んだ。ああ、捕まっちゃったよ。ここから先どうなるか。私の夢を超えた現実が目の前にあるんだ。

教室の後ろ側に向かっていた私は男に捕まる。そして、ナイフを首のあたりに向けられたまま後ろの出入り口から廊下に出た。左手で私を押さえつけて、右手で首にナイフを突きつける。

「吉田先生、山本先生。」

私たちと入れ替わりで国語の林先生が教室へと入っていく。

「生徒から離れなさい。」

そう叫ぶ先生は学年主任の高橋先生だ。男子の体育を基本的に担当していて年齢の割に体つきが良い。

そのころには一、三年担当の先生たちも私たちを挟んで廊下の両側に集まりだす。正直先生の名前が分からない。

「うるせえ。近づいたらこいつを刺すぞ。」

男が右手に持つナイフを再度私の首の前に持ってきた。ナイフは既に赤く染まり、さらなる恐怖を呼び起こしていた。

「咲希ちゃん。」

綾の声がどこからか聞こえる。

前を見ると保健室の先生も教室に入っていた。ならば救急車もくるだろう。あとは私にくっ付いている男だけか。

男を見上げると、男の息遣いが聞こえてくる。凄く興奮しているようだ。

男は私を連れて少しずつ後ろに下がり始めた。

その行為によってナイフの位置が首から少し遠ざかる。

「ぎゃあ。」

その瞬間、男は悲鳴を上げた。

後ろから来た男の先生が、ナイフを持った男の右手首を私の前から遠ざけた。

それとほぼ同時に、前に居た高橋先生が男の右手を押さえる。男は右手に激痛が走ったために左手が緩む。私はその隙を突いて、男から離れた。それと同時に男に先生たちが襲い掛かる。先生がナイフを男から取り上げる頃には、既に男は先生たちに確保されていた。そのあとすぐに救急車と警察がくる。

怪我をした先生は病院に運ばれて、私たちは警察の人にその場の状況を聞かれることとなった。そして突然起きた事件は終わりを迎える。

そのあとは全校集会をして、集団下校をした。

帰宅後にお母さんに事件の話をするると凄く心配された。やっぱり、心配するだけのことだったのだ。

次の日の朝、新聞を見るとやっぱり事件のことが載っていた。怪我をした先生たちは命に別状は無いものの、少々休まないといけないことになった。ナイフで刺されたんだから、そのぐらいで済んで良かったと思う。

新聞でたまに見る学校での事件。その事件がまさか自分の学校で起こると思っても見なかった。

今回、自分が事件の一部を夢で見た上で夢の通りに事が進んでしまった。だけど、最後は夢を超えて事件を解決することが出来た。とは言っても、私は助けられただけなんですけどね。そうなんですけどね。

「行ってきます。」

「いつてらっしゃい。」

何時も言う、私とお母さんの言葉。この言葉が普通に言える事が大切なんだって思えた。

玄関のドアを開ければ、雲ひとつ無い空。

今日も私の学校生活が始まる。

私は明日の夢を見る。しかし、それは夢であって現実では無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5709e/>

私は明日(あした)の夢をみる

2011年2月11日23時55分発行